

透析効率の考え方

上山達典

平成 26 年 6 月 26 日/鹿児島県「第 28 回鹿児島県透析医会総会特別講演会」

「透析効率の考え方」という演題で、医療法人社団清永会矢吹病院副院長の政金生人先生にご講演をお願いした。講演内容は大変わかりやすく、即臨床に通ずるものであった。以下、政金先生に代わって上山から簡単に要旨を述べる。

まず、長時間透析、頻回透析の効果を呈示され、なぜそれが良いのか述べられた。正常な腎臓との違いは物質除去の違いといわれた。透析で必要な除去物質は、すなわち尿毒症性物質であり、それは、①小分子物質(45種)、分子量 500 未満、②蛋白結合物質(25種)、分子量 58~21,200、③中分子物質(22種)、分子量 500~32,000 である。それをいかに除去するかできないかで、いろいろな合併症がおこってくるのではないかと言われた。

次に小分子物質の除去率の指標として、Kt/V がある。JSDT では 1.2 以上を推奨するが、目標として 1.4 以上が望ましいとなっている。しかし、先生は 1.6 以上でさらに効果があると述べられた。さらに長時間透析を行うと 5 年生存率は圧倒的に良くなっている。夜間在宅透析は腎臓移植と変わらないということであった。

次に β_2 -MG について述べられた。 β_2 -MG を低レベルにおさえると予後が良いが、しかし β_2 -MG の除去効率のよいダイアライザーが予後を改善するという明確なエビデンスはない。長時間透析(1日当たり6時間以上)、頻回透析(週当たり5回以上)などを行うことが、生命予後をよくすることであると力説された。

次に HDF が最近よく施行されてきているが、その理由は統計によると合併症の予防、透析困難症、透析アミロイドの予防等であるとのことであった。さらに low flux の透析との比較において、総死亡の低減効果、心血管死、透析低血圧低減効果、 β_2 -MG・homocysteine の除去に有効、IL-6 など炎症マーカーの低減など、最も良い透析と思われていたが、最近、体重増加、アルブミンの低下などの報告もあり、今後の研究が待たれる。

次にダイアライザーの生体適合性も非常に重要であり、日常よく使用されるポリスルホン膜には PVP の溶出がみられ、アナフィラキシー、体重減少などがみられることもあるとのことであったが、EVAL 膜、PMMA 膜は生体適合性に優れ、吸着によって溶質除去ができ、抗炎症作用、抗酸化作用などを有する S 型ダイアライザーであると強調された。

最後に透析効率の考え方として、

- ① 何を除去するのかターゲットを決めて除去を考える。
 - ② ターゲットとする物質の除去効果が、生命予後や合併症発生のサロゲートマーカーになるかどうか検討する。
 - ③ もっともよいモニタリングの指標は何か検討する。
 - ④ 透析効率至上主義であってはならない。
 - ⑤ 生体適合性も非常に重要な因子である。
- と述べられ、講演会は終了した。

先生の透析に対する熱意が伝わる講演で、透析を行いました後、情報交換会があり盛会裡に終了した。っている者には大変有意義な内容であった。講演会終

*

*

*